

慶賀

日本子ども学会理事・お茶の水女子大学名誉教授

内田伸子先生が 令和3年度文化功労者 として顕彰されました。



内田伸子先生が、心理学の分野における業績により
令和3年度の文化功労者に選ばれました。
心よりお祝い申し上げますとともに、先生の益々
ご健勝とご活躍をお祈りいたします。

PROFILE

内田伸子(Uchida Nobuko)

- 【現職】 IPU・環太平洋大学教授、お茶の水女子大学名誉教授、
十文字学園女子大学名誉教授、順天堂大学客員教授
- 【専門分野】 発達心理学、言語心理学、認知科学、保育学
- 【履歴】 お茶の水女子大学文教育学部卒業、同大学院修了、学術博士(Ph. D. in
Psychology)。お茶の水女子大学大学院教授、お茶の水女子大学理事・副
学長、2012年筑波大学常勤監事、2014年十文字学園女子大学理事・特任
教授。2019年より現職
- 【著書】 『子どもの文章-書くこと考えること』(東京大学出版会, 1990)、『まごころ
の保育-堀合文子のことばと実践に学ぶ-』(小学館, 1998)、『発達心理-
ことばの獲得と教育』(岩波書店, 1999)、『発達の心理-ことばの獲得と学び』
(サイエンス社, 2017)、『子どもの見ている世界-誕生から6歳までの「子育て
親育ち」』(春秋社, 2017)、『AIに負けない子育て-ことばは子どもの未来を
拓く』(ジヤース教育新社, 2020) 他多数
- 【社会活動】 NHK「おかあさんといっしょ」の番組開発・コメンテーター、ベネッセ
の子どもチャレンジの監修、しまじろうパペットの開発、創造性開発の知育
玩具「エボンテ」(シャチハタとの共同開発) など
- 【受賞歴】 城戸奨励賞(日本教育心理学会, 1978)、読書科学研究奨励賞(日本読書
学会, 1980)、読書科学賞(日本読書学会, 2000)、磁気共鳴医学会優秀論
文賞(日本磁気共鳴医学会, 2006)、国際賞功労賞(日本心理学会, 2016)、
文化庁長官表彰受賞(文化庁, 2019)、文化功労者(2021) など

出逢いの恵みに 包まれて

内田伸子（日本子ども学会理事、お茶の水女子大学名誉教授）

小林登先生との出逢い

小林登先生に出逢ったのは今から30年前のことである。ベネッセ(当時福武書店)の福武總一郎社長が「子どもについて語る談話会」を組織され、2ヶ月に一度、子どもに関連する研究をしていた人々が集まりおしゃべりをする会を設けてくださった。小林登国立小児病院院長、文化人類学者の箕浦康子東大教授、システム工学者・医学者の石井威望東大教授、認知科学者の佐伯胖東大教授、発達心理学の私（お茶の水女子大学助教授）が参加していた。円卓を囲みながら、みな自分の狭い専門分野や職階にとらわれることなく、子どもについて対話が弾んだ。

対話の中心は小林登先生である。小林先生の発想や提案はとても柔軟で豊かで大いに啓発された。小林先生は、「子育ては日本の未来を創る営為である」と力説された。特に都会の子育てが、「孤育て」となり、子どもを支える地域共同体が壊れていくのを嘆いておられた。

このとき、小林先生の口から「ドゥーラ」ということばが発せられた。小林先生は、「日本にも「ドゥーラ」はいる。明治や大正のお産婆さんは「ドゥーラ」であり、妊娠初期から妊婦に付き添い出産したあとも母乳で子育てができるよう新米母親をサポートする人である」と説明された。このことばに、思わず、「私の母も群馬の田舎のお産婆さんで、日本の『ドゥーラ』でした」と発言した。

群馬の「ドゥーラ」との出逢い

母は助産婦、いわゆるお産婆さんである。父の家は代々加賀藩の御典医。慶応3年の政変で廃藩置県が敷かれ、一家や使用人は江戸に移住し家長の父を病院長、長女を総婦長として総合病院を開いた。母は助産婦・看護婦として働いていた。「陰日向なくよく働く人」と婦長に見初められて父と結婚した。長男（私の兄）も生まれ一家の暮らしは幸せであった。

しかし、幸せは長くは続かなかった。1945年3月10日の東京大空襲で父の病院はすべて灰になり、父の弟や姉はつてを求めて地方の病院に移っていった。父は母の実家の群馬県沼田市に移住し病院を開いた。間もなく兄は肺炎に罹り亡くなった。最愛の息子を失った父母の悲しみはいかばかりであったろうか。その悲しみから立ち直るべく父母は昼夜も惜しんで働いた。病院が順調に動き出して間もなく、私が5歳になったときに、父は脾臓腫瘍で急逝した。以後、母と私の二人の暮らしが始まった。

第二次世界大戦後、ダグラス・マッカーサー連合国総司令官のもとで日本の復興が急ピッチで進められた。世の中はどこもかしこもとても貧しかった。私の周りにも戦地で父親や兄を亡くした母子家庭が多かった。私の母は暮らしを立てるために助産婦として働いた。父の遺した病院「村上病院」は「村上助産院」と看板をかけかえ、入院も受け入れられるようにした。

しかし、当時は殆ど自宅分娩なので、母は「産気づいた」の知らせが入ると、自転車で野山を越えて出産

に立ち会った。

武尊山^{ほたか}や赤城の山奥の農家にも助産に行く。姑や舅、小姑たちも出産に立ち会う。子どもたちも固唾を呑んで弟か妹が生まれるのを見守るのが常であった。貧乏百姓は子沢山。嫁は出産翌日から野良に出る。子沢山の農家の暮らしは貧しく厳しい。間引きは子沢山の農家ではしばしば行われていたらしい。なかには、障子紙の切れ端を濡らして母に手渡し手を合わせた。母は障子紙を姑や舅に押し返し、手早く産湯をつかわせて、「かわいい赤ちゃんよ」と母親の胸に抱かせてあげた。

農家で密に行われていた間引きをなんとかしないといけない。母は「産児制限」の方法を模索しはじめた。中絶は母体を傷つける。母体を護る安全な産児制限を探して、荻野久作博士が考案した「オギノ式」にたどり着いた。オギノ式は、排卵日をもとに、安全日と妊娠可能日を算出する方法である。貧しくても、望まない妊娠でも生まれた赤ちゃんには生きる権利があるという信念をもって、農家の嫁たちに教え、夫にも協力するよう約束させたという。

赤ちゃんの生きる権利

望まない妊娠をしたときに、おなかが目立たないうちに妊婦を受け入れて、助産院のお手伝いさんとして住み込みで働いてもらった。出産後、母親には新生児を一切見せず、子宝に恵まれない夫婦に引き取ってもらったようだ。後に「赤ちゃんあっせん事件」として菊田医師が罪に問われた。母は私に細かい事情を話すことはなかったが、母が「これで赤ちゃんも、母親も、養父母も救われる」とつぶやき、安堵している母の姿は今も記憶に焼き付いている。

とりわけ貧しい人々－未開放部落の人々や在日韓国・朝鮮人－が鍛冶町のはずれ、「下町」に住んでいた。上町の住人の下町への差別意識はすさまじかった。上町の子どもたちは「下町には近づくな」「下町の子どもとは遊ぶな」と言われていた。しかし、母はその人たちを分け隔てすることなく助産を引き受けた。母

は「その人たちも同じ人間。分け隔てしてはいけない」と幼い私に言い聞かせた。母のところには古着が集まる。まだ着られそうなものは洗濯し、ほころびを繕い、ボタンを付け替え、その人たちに届けていた。

母は家族の食べ物も十分でない人々からは助産料は受け取らなかった。彼らは助産料のかわりに、山で採ったハコベ、よもぎ、のびる、山うど、山露^{やまぶき}、大葉、枸杞^{くこ}の実やタラの芽、きのご類、キムチ漬けなどを遠慮がちに勝手口においていってくれた。農家からも収穫時期に助産料として米や麦、粟、大根、白菜などが届けられた。料理名人の母は美味しい山菜料理を食べさせてくれた。

娘と「娘たち」との出逢い

母は65歳まで助産婦として働き、2万人もの赤ちゃんの誕生に立ち会った。その後、千葉県市川市に移住し、私の子育てを助けてくれた。娘はお茶大で発達臨床心理学を専攻した。専門科目の「特別支援教育」に関心をもち、お茶大卒業後、北大医学部を再受験。現在は千葉大附属病院の小児神経医として障がいをもつ子どもの医療に力を尽くしている。母の助けがあったればこそ、娘を育てながら、国内外の「娘たち」の教育に携わることができた。彼女たちは、国内外の拠点大学の教員として、教育や研究に活躍している。

文化功労者に選定されて

私は、2021年度の文化功労者に選定された。お祝いの電話をかけてくれた親友は「お母さんが生きておられたら、どんなにか飲んでくれたでしょうね。この度の顕彰はお母さんの支えがあってこそその快挙ですもんね」と真っ先に母久子のことを持ち出した。群馬の親戚たちも、「久ちゃんが生きていたらどんなに嬉しかったらうね」と口々に母のことを口に出した。「文科省研究振興局学術調査官室の新聞報道文書」には次のような顕彰理由が記されている。

「心理学の分野において、主に子供の発達段階に着眼し、言語、思考、育児、教育、福祉等の幅広い領域での研究により、人の心の成長や環境の働き、子供と養育者のかかわりの重要性を明らかにするなどの顕著な業績を上げ、斯学の発展に多大な貢献をした。〈中略〉氏は、さらに、心理学の基礎研究のみならず、子育てや教育の現実に寄り添い、一般向けの書籍を通じて子供の社会性、認知能力、情緒を育むことに貢献する知見を提供し、児童虐待など逆境にある子供の支援や対応につながる研究の蓄積・普及にも貢献してきた。また、21世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」等の拠点リーダーとして、人間発達に関わる研究を牽引し、国内外の多くの研究者の育成にも尽力してきた。〈後略〉以上のように、氏は、心理学の分野において子供の発達段階に着眼した研究に取り組んで優れた業績を上げ、その功績は極めて顕著である。」

(※筆者が下線を施した)

問い続けながら

私が心理学徒として世の中の人々の課題解決に少しでも役に立つような仕事をしたいと思い続けてきたのは、小林登先生の小児科医としての姿勢、つまり、異領域・異年齢の人々を「つなぐ」、社会の人々を影で

支える人に「光をあてる」、社会的弱者への貢献を「最大限評価する」という姿勢から学んだことによる。

そして、子ども時代に、日本の「ドゥーラ」村上久子の姿、身を賭して社会の弱者を支援する母久子の背中を見てきたことによるものと思っている。二人との出逢いから得た恵みは、娘や国内外で活躍する「娘たち」にも伝わっていると実感している。

娘が研修医になった夏に、父が博士号を取得したベルン大学のメディカルスクールを見学した。父が暮らしたベルンの街を散策した。ノーベル物理学賞を受賞したアインシュタインが暮らしたアパートが「アインシュタイン博物館」(写真)になっていた。書斎の壁にはアインシュタインのことばが英語・仏語・独語で掲げられていた。

“ Learn from yesterday, live for today, hope for tomorrow. The important thing is not to stop questioning. ” – Albert Einstein

歴史に学び、今日の暮らしを精一杯ていねいに生きること。そうすれば希望の明日が拓かれる。肝心なのは問うのを止めないことである。このことばとの出逢いは、私の生き方の指針となった。父と母がくれたこの生命の道を仕舞(終い)まで、精一杯ていねいに生きていきたい。たえず、問い続けながら、心の不思議を探究する旅を続けたいと願っている。

肝心なのは問うのを止めないこと

*“ Learn from yesterday,
live for today,
hope for tomorrow.
The important thing is not
to stop questioning. ”
— Albert Einstein*



EINSTEIN HAUS